

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成17年  
2月号

毎月23日発行  
通巻414号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成17年2月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1-0015  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷製  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



鶏杜旧蹟顕彰碑 (大倭神宮) 井手 泉さん撮影 (関連記事・6頁)

『大倭新聞』第15号より再掲載

## かん 神ながらの宗教 こと 言あげせざる宗教(下)

つきなみさい  
昭和40(1965)年10月23日月次祭法話より 法主 矢追日聖

### 地下水として生きる

先ほど歌いました聖歌「黎明大倭」の最後は、「昭和維新の人柱」というような、現代人が聞いたら悲壮な感じに受け取れる言葉なんですけどね。あれは、そうじゃないんです。

昭和は、今の時代を表す日本の年号です。

維新というのは「これ新たなり」ということですから、血を流すような暴力革命とかそういうのではなく、改まってゆくんです。

例えば今までランプだったのが電氣を使うようになった、これも維新です。まあ、ランプと電氣の場合ならランプが古くて電氣が新しいと誰でも言えるんですけどね。けど本質的に言えば、どっちが古いとか新しいとかいう言葉を使うのはおかしい。これは分からない時もあるんですが、結局、その時、その時で形が変わってゆくということなんです。

いわゆる宗教について考えてゆけば、お寺とかあるいは教会とかそういう所に宗教があつて、そこへ行って説教でも聞くとか、そこで宗教を味合つてくる、そんなのが今までの既成宗教なんです。坊さんとか神主さんとか、神父、牧師さんとか、そういう特殊な人だけが悟つて持っているものが、宗教だと思つていんです。しかし、絶対そうじゃないんです。我々が自覚しないとしても、宗教というべきものは、心にあるはずなんです。

誰でも皆、赤ん坊でも持つている。それを、お互いに自分で出さなければいけないんです。

現代では、お寺に参って修養しようとか、神さん仏さんに頼んで自分を人間的に向上してゆこうとか、何かしら一般の我々の家庭とか大衆と、切り離された高い所に宗教というものがある。だから、その宗教を求めて取りに行くんだ、自分のものにするんだと、こういうような考え方なんです。それは根本から誤っているんです。

本当の宗教というのは、今言うような特殊な人のいる、我々から見れば高いような所にあるのではなくて、我々の心の中にある。漠然とした話ですがね、これが宗教なんです。

そこで大倭というのが昭和という現代に、維新の人柱になってゆかないやならないんです。

この人柱はね、昔の時代に橋とか架ける場合に犠牲として生きた人を埋めたとか、戦争中に兵隊を橋げたにしたとか、そんな悲惨なものじゃないんです。

家を建てる時、柱はなくてはならぬものです。人間の家屋の中の柱は、実に穏やかなね、いい立場のものなんです。柱が一切のものを支えているんですから。

今は宗教というものが、どこが柱やら頭やら尻やら、ごちゃごちゃになって潰れているんですね。

それを今、大倭の者が、立て直しの柱の存在として社会へ、これから出て行かなければならない。本当の、いわゆる宗教的なものを作っていく役目を一人一人が担ってゆかなければならない。

血を流して犠牲になるような、そんな悲壮なものじゃないんです。ちようど、日蓮さんでも「我、日本の柱とならん」とおっしゃった、ああいう意味の柱なんです。

これが霊界から、「昭和維新の人柱」と聞こえ

てきた言葉の意味なんです。

今日、宗教と名のつくものがたくさんありますけれど、その中で大倭は、潰れたそういうものを、もう一度立て直してゆくというような、大きな役目があるんです。

## 権力と結びつかぬ宗教

しかし大倭の場合は、大倭教の信者を獲得するんじゃないんです。大倭教団としての信者が、仮に創価学会のようにたくさんできたとすれば、これはもう既成宗教と同じ道を踏んでいるのであって、一つもそこに維新というものはないんです。既成宗教の化け物ですね、同じものが再現するんですから。これでは、改まっていけない。

大倭の場合でも、信者がたくさんできて、我々は大倭教の信者であるという風の一つの団体になってしまおうと、大倭教の信者だけの持っている独占物のようになってしまおうんです。

そういうものではないんです。だから、大倭教を信する人が、信者として何百万人という大勢で結束する、そういうようなものを、私は望んでおりません。

私が言う「神ながらの法」というものは、仏教が日本へ来る以前から、我々日本民族が持っていた宗教なんです。その頃には宗教団体というようなものはなかったはずなんです。

仏教が来てからね、仏教の信者ですと言ってお寺を建てる、木仏金仏を並べるといふ形になってきたんです。仏教の来る以前の、日本の神ながらの宗教には、固定した一つのご本尊もないし、また自分は神ながらの信者であるという、そんなものもなかったんです。

その代わり、その当時のどこの家庭においても、

日本人一人一人の心の中に皆、神ながらの宗教というものを持つておったのです。それはもちろん、今の日本のような文化社会じゃありません、もつと原始的であつたかもしれないよ。しかし、その持つておった宗教が、自分の日常の中に、あるいは社会の人々の中において生きていたと思うんです。これが、今、在家宗教とかいう、それなんです。

そういうようなところへ仏教が出てきたがために、お寺という中心ができる。金びかの仏さんのところへ行つて拝まなければ、仏の恵みにはあえない、功德がないとか言うので、それこそお寺へお寺へと皆集まつて行く。

お寺の中には僧侶という教える人がいる。その教える人がだんだんと生き神さんのようになってゆく。そうすると、一つの宗教的権威というものが生じてきてね。奈良朝頃には弓削道鏡というような、天皇の高御座をねらう僧侶も出てくる。仏教なんかの墮落した一面です。

これはもう、宗教ではなくして宗教的権力なんです。それが政治的権力と結びついてゆくんです。

## みんな仲よく

これは一番危険なことなんです。大倭教であれば、大倭教の信者として何百万の人の団体ができて矢追日聖というものを御輿の上にかつぎあげるんです。そういうような固まりが宗教的権力を持つた場合には、社会に対してものすごい圧力となります。私が望まなくても、そこに一つの政治的な権力というものが自然についてくるんです。

矢追日聖が右向け言うたら、何百万という人が右向く。あれは恐ろしい存在やなと、社会の人に対して宗教であるのに恐怖感を与える。これは宗

教の本質に逆らうことになるんです。

ですから、私がいつも言うように、大倭教の信者にならなくていいんです。皆さん一人一人の心の中にさえ、神ながらの法というものが、つまり自然と共にゆくというものがあれば、別に大倭教の信者でなくても、例えばキリスト教、あるいは仏教とか天理教に所属しておってもいいんです。

誰であつても心の中にさえ、自然の法則に従つたような家庭をつくり、あるいは自然の法則に従つた社会になるように努めてゆく、そういうものがあればいいのです。

これが、大倭で言っている奈母太加天腹(なもたかあまのはら)ということ。奈母というのは、順応することなんです。自然の法則どおりに我々が順応してゆく、これがね、一番いいと私は思うんです。

秋になつてくれば服装でも秋らしい服装をする、また冬には冬らしい服装をする、夏になれば薄着になるということは、一つの自然の動きに対して我々が無条件に、理屈なしで順応してゆく姿なんです。自然と人間のふれあいのようなものなんです。それは本当に人間対人間が、裸と裸で抱きつくような一つのふれあいですね。

そういうふうにお互い一人一人さえ努めていけば、世の中の色々なことも、ある程度緩和してゆくんじやないかと思うんです。

複雑な社会ですから、まあ、今日は漠然とした話なんですけど、神ながらの法則を一人一人が細かく研究し、また自己修養していく、それが一番いいことだと思えます。

大倭の宗教の、大きな動きというものは、そういうような中にあるんです。

大倭教はありがたいんだ、だから自分は大倭教の信者なんだというふうな、大倭教を独占するよゆうな、神ながらの道を自分一人のものだというよ

うな、あるいはまた大倭教は自分のものだというふうな考え方を持たないでほしいんです。

神ながらの大法は、我々人類が発生する前からあるんです。その神ながらの法というものを、我々人間の社会において実際に行つてゆく、実現してゆく、あるいはそのとおり踏んでいくのが、最も自然な生き方だと思つてます。それが神ながらの道です。

神ながらの法というのは、もともとあるものです。神ながらの法に従つて我々が世渡りをしてゆく、それが神ながらの道なんです。

だから、法と道というものをよくかぎ分けて、我々は道というものについて、これからお互いに自己修養し練磨してゆく。そこに人間的な向上もあると思つてます。そういうような方法について皆さんも精通してほしいと思つてます。今日はこの辺にしておきます。拍手合掌

### 時の波蕩(その十二)

## 「国づくり」の血と涙

林 修 三

その二つの塚の前に立てば、古代がしのばれる。馬に跨り、疾風の如く野を駆ける智恵ある戦士の姿が……。

大阪府枚方市牧野の地に、ほとんど知る人のない、ささやかなアテルイとモレの塚がある。今を去る一千二百年もの昔、

「国づくり」という非情な掟の前に無念な死を遂げさせられた「まつろわぬ」二人の勇士の眠る場所である。

「大倭維新」、「大化維新」、「明治維新」……と連綿と今なお続く壮大な事業が目指す「国づくり」とは、何なのだろう？

その過程で流された人々の血と涙、そして多く

### 矢追日聖著

「ことむけやはす」野草社刊

第一巻『やわらぎの黙示』

第二巻『ながそねの息吹』

各巻三、一五〇円(税込)

大倭出版局

の悲しみは、今もその痕跡を、この世とあの世にしっかりと刻んでいる。

世を治める者にとつての摂理と人の情、その間に生まれる様々な人間的苦悩は、恐らくはその当事者にしか理解しえないものなのだろう。

牧野の地は、その名の通り古代、美しい野と、淀川に注ぐ河筋に、多くの放牧された馬が点在していた。ここは紛れもなく、アテルイとモレに死を命じた桓武天皇の愛した土地であり、国家安泰を祈つた場であり、さらには彼の母方である、親しみあふれる渡来系の人々の、文字通り母なる土地なのだ。この地の小高い丘からは桓武の生まれ育つた大枝の地も果か西北に望まれる。この様に自身にとつての聖地とも言える地において、わざわざ処刑を命じた桓武天皇の心情とは如何なるものであつたのか。そこに私は史実に残され得ない桓武天皇、坂上田村麻呂と東北の雄、アテルイ、モレの細やかな心の交流を感じるのである。

歴史上、猜疑心に彩られ、弱肉強食と化したおどろおどろしい人間の権力争いの隙間に、真っ直ぐな光を放っている人々がいる。今、牧野の地に立てば、暗い歴史の闇の中から、その四本の光芒が見える気がする。その内の一本は、霸王と呼ばれ、絶え間ない権力争いに疲れた人間が、理想に燃えた若き日を回顧して放つた一本であつたかもしれない。

# あじさいアルバム

## —法主様と一緒—

＊山崎 波留茂

あじさい邑



第240回大倭会文化行事 平成6年1月16日新年懇親会

頂いたことがあります。その時法主様から成長したなあというような言葉をかけてもらったのですが、「心配かけていたのだなあ」と心から反省したという言葉にあらわせない気持ちを感じました。以後、少しでも喜んで頂けるようにと思い、これからもその気持ちを持ち続けたいです。

＊佐藤 孝子

神戸市垂水区

悠久の時の流れの中、ほんの一瞬、大いなるものからお借りしたわずかな時間に身をゆだね過

私は、大倭で育てて頂いたにもかかわらず、あまり法主様に甘えたり話したりした記憶がありません。心に残っているのは、よく怒られたことです。そんな私にもほめて貰ったというか喜んで

は、法主さまにお会いするためだったのではないかと……。

法主さまとの出会い、それはふとした偶然でした。その偶然も、縁あればこそであり、時を同じくしてこの国に生をうけ、遇い難い法主さまにめぐり遇うことが出来ました。積尊、キリストの教えも、経典、聖書では直接性をもたないと思っ

て居りましたところ、はからずも法主さまにお会いし、生き身の法主さまから、天の法、自然のいと

なみ、世のしくみをかずかずの言葉でじかに聞く事が出来ました。その感動は、私の人生最大の喜びであり、生涯の基本となりました。

物質的な幸福は常に不安定であり、精神的な幸福さえ永続きしない。しかし法主さまとの得難い出会いの縁を得たことこそ、たしかな幸福であり、果報者であると自負し、唯々感謝の日々を過ごして居ります。



昭和43年11月2日 飛火野で

して来ました。そしてそのお借りした時間も残り少なくなりました。今も相変わらず、あな

＊水野 勝美

奈良県橿原市

法主様との想い出(出会い)をと編集部から一枚の写真を見せて頂き、原稿を依頼されました。私としては、自分なりに法主様との想い出は秘かに心に残して置くものと思っ

ていましたが、書く事となりました。私事では有りますが、今年

は年男で大倭六十年と同じ年で御座居ます。又この三月末日で一般社



が少しも私の御恩返しに成ったかなあと思っ

★中島 佐栄子

あじさい畠

思っております。今後共宜しくお願い致します。



昭和57. 6. 11 文の里民謡会30周年記念 民謡まつり 毎日ホール (右から2人目私)

法主さんの思い出は、いろんな事がいっぱいあって、考えているうちに日がどんどんすぎていってしまいました。その中でなんといいっても、一緒にさせて頂いて本当によかったな、と思う事がありません。それは、「新日本舞踊、おどり」です。ある日法主様から「おどりの先生が大倭に来て下さる事になったので、皆な来れる者は一緒に習おう」と声をかけて頂きました。それを聞いて半信半疑でしたが、実際先生が来て頂いた時は驚きました。と言うのは今大倭病院の建っている所の山の上には、大倭ブロッコがありまして、その下には家や池がありました。須賀の道はまだ影も形もなく、こんな山の中に大阪から来て頂けるなんて思っただけです。声をかけてもらったものの当時は

子育て真最中、毎日子ども世話でてんやわんやです。取り敢えず見学にいかせてもらって田中先生とお話させて頂いたら、「子供さん

連れてきてもいいですよ」といってくださったので思いきって習う事にしました。

教室の名前も「あじさい教室」と決まり発足時は

三十人程、大倭会館がいっぱいになる位の生徒数でした。二年目には初舞台、皆で踊れば怖くないといった心境でそれでいて快い緊張感がありました。それから数年いろんな所で舞台にも出させてもらいました。大阪の文の里の本部に仕事が終わってから通いもしました。おかげで昭和五十七年には名取の試験にも合格し一つの区切りが出来ました。

その「あじさい教室」での練習の中で法主様の一貫した姿勢をみて勉強させられた事があります。それは、どんなに忙しくてもきちんと着物、あるいはゆかたに着替えられて先生を迎えられていた事です。先生が遠い所からきて頂いているのに、出迎えるものがきちんとせなあかん。それは、「人に礼をつくす」と言うことや、と教えて頂きました。人にはやさしく包容力があって、それでいて自分にはきびしい法主様でした。

毎年日聖祭の直会演芸会の舞台を見るたびに、紋付、袴の衣裳であでやかに舞っておられた法主様が目に浮かんできます。今振り返ってみると私にとつて最も充実した楽しい時期でした。

身をもつて教えていただいた生き方の姿勢は、一生の宝として大切にしていきたいと思えます。

★中島 充世

あじさい畠

昭和六十二年四月二十九日、私は大倭一門の中島康治のもとへ嫁いできました。そして、この日から私の中で法主さんがとても身近な方になりました。それまでは、施設の新米寮母だった私にとって、法主さんは雲の上の人と云っていいほどの存在だったのです。しかし、慣れない生活と子



育てに追われ、法主さんのお話を聞かせて頂くのは月に一度瑞光院で開かれる帆立会の時ぐらいでした。そんな中でも特に心に残っている

ことは、体調が悪くてもなかなか病院に行こうとしない主人に、「もう少し自分の身体のことを考えてもらうように言って下さい」と何度となくお願いに上がったことです。主人という人は、本当に法主さん以外の人の言うことを聞いてくれない人でしたので……。そして大倭の生活にも少し慣れてきた頃には法主さんは霊界へ帰られてしまいました。

今おられたならばもつと色々なお話を聞かせて頂くことができたのかなと思います。その七年後まさか主人までが逝ってしまうなんて、このときばかりは「法主さんどうして……」と思いましたが、一年四ヶ月たった今、私たち家族は元気に生活させて頂いています。これは大倭の人々のお陰と、なによりも裏の世界からの法主さんの大きな支えがあるからだと思えます。これからは主人が愛した大倭、法主さんが支えて下さっているこの大倭で暮らして行けたらと思っています。

「隆家」の頃の法主（12）  
 とびのもり  
 鶏杜旧蹟顕彰碑について  
 矢追 隆義

国家の手により、神武天皇御東征時の足跡を、皇紀二六〇〇年（昭和十五年）記念事業として顕彰することになった。富雄村においても『古事記』『日本書紀』の文献に基づき、伝承、金石文字等の資料を集め、古代鳥見の地として名乗りをあげることになる。

兄は先ず第一に、伝承地として標示する何か形のある物が必要だと、又、多年の念願である鶏杜顕彰にもつなげることをしたいと考えていたように思う。方法としては結局、鶏杜（大倭神宮）の一角に「恩地鶏森」等の石碑を建立することになる。

石は生駒石と決め、刻銘を兄が揮毫し、彫刻の作業は村の石材屋左野氏に適当な人材をお願いした。連れて来られた石彫りの名人とは、達磨さんのような、髭づらの、額から頭へはげ上がった、



通称留さんであった。留さんは出っ歯でどもり、変人（とま）で通っていた。しかし、あの硬い生駒石を刻む技術については、彼の右に出る職人はいないとのことであった。



仕事にかかっていたから気分が向かなければ仕事はそっちのけで、フイゴの前に半日でも一日でも坐り、ノミを焼き、その先を打っていた姿を覚えている。反面、気が向けば食事時間も忘れて彫り続けるといふ変人ぶりであった。仕事の進行は留さん任せであったが、仕事に関係なくちよいちよい兄の許へ来て、「旦那はん、ちよと」と鉢巻

きを取り、頭を掻きながら無心を言っている姿も見受けられた。酒は好きだったらしい。

やがて玉垣内に鶏杜旧蹟顕彰の碑が彼の手により完成をみた。そこに浮き彫りにされた金鶏勲章（表紙写真）の出来栄え

は不朽の名作と言われ、彼の技術が認められた。金鶏勲章のモデルになったのは功四級で、父の姉婿の北尾貞次郎氏が日露戦争に陸軍中尉として出征された時の功により受けたものである。

又同時に「金鶏霊時鳥見山中聖蹟」と彫られた石柱碑が建立されたが、この方の文字は、小谷文齊氏の親友で、文学博士 日本書芸院理事長の田中塊堂氏（別号成美、昭和51年没）の手によるものである。彼が大倭神宮に参詣された時に作られた句、「鶏光る 鳥見の里なる 稲の花」は、田中先生直筆を軸として大倭で保管されているはずである。

右の写真は、顕彰碑を建立する為に運び込まれた生駒石の中での一コマである。



向かって 左端より兄（隆家）、成川栄三郎、成川貞：兄の長女（輸瀉美）、弟（隆盛）、留さん・子犬（熊）、小生（隆義）

# 風ぐるま

## 「念」を入れて

長崎県西彼町  
安藤 勇

大倭を離れて、早や二十六年になります。四半世紀を超える歳月を経てもなお大倭の「磁場」に捉えられ、恩寵と足かせの中にいる私達夫婦ですが、立教六十周年を過ぐる今年、縁あって拙文を寄稿できる僥倖に感謝したいと思います。

昨今の言葉遣いの乱れ、とりわけ若い世代のそれはどうでしょうか。嘆かわしいと言うよりは、ほとんど理解できない場合すらあるのが現状です。「言霊」はいつから死語になったのでしょうか。

言葉が単なる五十音の順列組み合わせではなく、言霊として不可思議な霊感を宿し、言葉が本来的に持つ霊妙な働きで「言霊の幸わう国」としてあるべき姿に立ち帰らせるにはどうすればいいのでしょうか。

「ことだま」とは何か（平成五年四月号）の中で法主さんは言います。《私の心から出ておる電波っていうかネ、電波みたいなものがですね、それが先に私から出ていくんです、皆さんのところへ。で、それをあなた達が言葉でない以前に受けている訳ですワ。そしたら今度はあなた達の「受けよう」という靈魂の念の働きが、あなたらの方から出てくるんですね。そういうた念と念との交流によって本当の理解ができるんですけれど、その念と念の交流が出来ない場合には、言葉から出てくる本当の調和の姿は出てこないんです。（中略）だから、ものを言う人の一つの念、出ていく念波と聞く人の念波と両方がこう一致する事によってその話が本当に相手に通じていく。》

つまり、お互いの思念が同調しなければ言霊としての機能は発現しないものらしい。常に穏やかで平和で仲良しの精神状態であるのは至難の業なので、凡庸な我々にとってはなかなか大変な課題です。ところで、いささか唐突に飛躍する展開になるのですが、「十種の神宝」の話です。

『先代旧事本紀』によれば、ニギハヤヒノミコトは天祖から授かった十種の神宝をもって河内国河上の霊峰に天降つてから、大倭国鳥見白庭山へ遷座したものとされ、崇神天皇七年神宝を布留の高庭（石上神宮）へ鎮め、物部氏の祖伊香色雄に任せ奉らせたとする。

ところが、昨年四月に発刊された小椋一葉氏著『古代万華』（邪馬台国と倭国の物語抄）によれば、《伝え聞くとところによると、実は十種の神宝は現在石上神宮にはないらしい。大阪市平野区喜連六丁目の橿原神社にあるというので訪ねてみると、網の目のように入りくんだ喜連の町の奥の橿原神社の境内に「神宝十種の宮」があり立て札が立っていた。天正元年（一五七三）八月、織田信長の軍勢の乱入によって石上神宮は宝物の盗難にあい十種瑞祥の神宝も持ち去られた。その後天下を取った秀吉は、心ある土に守られ保護されていた神宝のことを聞き、大阪の生魂の森深く奉納した。時は流れ、幕末の騒乱によって生魂の宮は暴徒に襲われ、神宝は持ち去られ生魂の森から消えた。ところが後年町の古道具屋の店頭に曝されていたのを喜連に住む人が発見。その後崇敬者たちの手を経て、橿原神社に奉納され社殿を建ててお祀りするに至った。室戸台風に遭い社殿が壊れた為、永らく拝殿にお祀りしてきたが、今里の庄司氏（石上神宮守護職の子孫）から石上神宮へ返してくれるよう頼まれた時も返さず新しい社殿を建立して未長く齋き祀るに至った。》

余談だがこの神社はカミさんの実家の近くで、その昔将来の身の行く末について迷っていた頃に偶然通りかかった経緯があり、本人はなにがしかの暗示めいた伏線であったと思っている。もし、小椋一葉氏が大倭神宮のことを承知していたらどんな風に書いたことだろう。

神武天皇の即位四年後、《今、ようやく無事平安を得た神武は橿原宮の郊外の鳥見山に祭りの庭を設け、皇祖天神を祀って感謝と誓いを述べた。これは神武の心の自然の動きとしてよくわかるのである。（中略）大和の西の矢田丘陵に沿って流れる富雄川流域に伝承地がある。「鳥見」はニギハヤヒが大和で最初に館を置いた記念すべき土地の名であった。だから神武が郊祀を行った山は、いつしか「鳥見山」と称されるようになったのだらう。》とだけ記すのみである。即位の際には、《祭神はニギハヤヒ大神の霊代十種神宝を安置し、神櫛をたてて奉齋した》とある。

我々としては、即位の地を橿原ならぬ、法主さんの言う御所柏原に、祭りの庭を古代大倭神宮に置き替えてみたい。

何事によらず物事には「時機」というものがあり、甚深微妙にして我々の到底思いあたわざるところであるので、思料の及ばない事柄について述べるのは、腰が引けて忸怩たるものがあります。それでも、悠久の時の中の自然の一員である我々にも「物実」としての「十種の神宝」が宿り、言霊を発しているに違いないと思います。

『ヒ、フ、ミ、ヨ、イ、ム、ナ、ヤ、コ、ト、フルベ、ユラユラト、フルベ』と。日常生活全てが振魂であり、なかならず「奈母太加天腹」の言霊こそが、大倭を離れた私達にとって世代を継いで、護符であり、呪縛であり、規範であり続けることでしょう。

